



ルー
テル

藤が丘だより

発行 月報委員会

発行日 2022年10月2日

№.

101

命のある限り、わたしは主を賛美し
長らえる限り、わたしの神にほめ歌をうたおう。

詩編 146 編2 節



礼拝献花より

御言葉に生きる

実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです。

ローマの信徒への手紙 10 章 17 節

ルター派キリスト教会 日本福音ルーテル藤が丘教会 牧師 佐藤和宏
〒227-0043 横浜市青葉区藤が丘 2-31-21 tel 045-973-2729/ fax 045-439-7009
URL:<https://www.jelc-fujigaoka.org/> mailto: fujigaoka@jelc.or.jp



シリーズ説教

『逆転の愛』

牧師 佐藤和宏

ルカ16章19～31節

「貧しい人々は、幸いである、神の国はあなたがたのものである。」

ルカによる福音書6章20節にある、いわゆる『平地の説教』の最初の教えになります。

「幸い」について、一般的な辞書に次のような説明がありました。「その人にとって望ましく、ありがたいこと。運のいいさま、都合のいいさま。」(goo 国語辞書) 一般社会において、「幸い」とは何よりもまず「その人にとって」、これが判断基準というわけです。主イエスが教える「幸い」ということと重ね合わせるなら、一般的な幸いは人の問題。主イエスが教える幸いは神の問題という点が、決定的な違いとなっているとわかるのです。

さて、先日「一日神学校」がオンラインで「心と福祉と魂と」という主題で、開催されました。開会礼拝で説教を担当された、神学校校長の立山先生がコリントの信徒への

手紙 12章の次の言葉に触れていました。「賜物にはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ霊です。務めにはいろいろあります。それをお与えになるのは同じ主です。」ルーテル学院大学、神学校は臨床心理、福祉、神学とそれぞれ違う賜物を持つが、それを与えるのは同じ霊であり、務めも違ってみえるが、それを与えるのは同じ主であるというわけです。このことは、もちろん私たち藤が丘教会の交わりにも、共通して言えることで、集まっている一人ひとりそれぞれ違う賜物を与えられ、違う務めが与えられているのですが、それを与えるのは同じ霊であり、同じ主である。これは間違いないことなのです。視野を社会に、世界に広げても、あらゆる人は当然、与えられている賜物も務めも違うのですが、すべてを生かすのは同じ霊、同じ主にちがいないのです。このように考えてまいりますと、私たち人間は違っているものであるということがわかります。同じであることよりも、それぞれの違いはかえって、神が与えられた大切な賜物であることがわかります。なぜなら最も

重要な点は、人の違いを結びつけるのが同じ霊、同じ主であるという事実だからです。「最も重要な掟」について問われた、イエスは「神を愛すること、隣人を愛すること」の2つをあげました。この2つの律法が決して切り離せないことを教えています。神を愛するとは、人を愛することなのです。人を愛することを通して、神を愛するのです。律法を守るといふことは、律法が命じること、表面的に守ればよいのではなく、その深みにある神を愛すること、隣人を愛することにほかならないのです。このことが律法の根底にある、神の御心なのです。神が人を豊かにするのは、その人を通して、助けを必要とする人々を愛するためにほかならないのです。ファリサイ派の人々は、律法が命じることを守ることだけに終始し、自分たちの行い、努力といった、「人の頼りとするもの」にのみ目を向け、自らを神の祝福にふさわしいとしたのだと、誤解しました。そのような彼らをたとえた、金持ちは、門前に横たわる「ラザロ」を愛すること、神を愛することになるということを知らなかったのです。これ

が「モーセと預言者に耳を傾けない」、「読み違えている」ということなのです。自らの豊かさに、行いに望みを置く彼らと対照的に、ラザロは「わたしの神は助けてくださる」という名前の通り、自らに望みを置くすべもなく、ただ神に頼るしかありませんでした。この現実には、この違いそのものに、神の介入があるということです。神による逆転です。

「貧しいものは幸いである」のは、神の国がその人たちのものだからであると教えられています。「富んでいるものは不幸である」と教えられるのは、その富もまた同じ霊、同じ主によつて与えられていることを忘れさせ、自らの努力、能力と誇つてしまふからです。違う賜物、違う務め、そのほかありとあらゆるものが違うのです。それはすべての違いを結びつけるのは、ただ同じ霊、同じ主であることを知るようになるためなのです。互いの違いをもって、お互いに愛し合い支え合う。こうして神の逆転が実現するのです。この逆転の愛にすべて委ね、参与する。これが私たち教会に望まれていることなのです。(聖霊降臨後第16主日)

大〇〇子神学生

「全世界に行つて、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。」

(マルコによる福音書16章15節)

「神は愛です」

(ヨハネの手紙一4章16節)

30年前、娘が大岡山幼稚園に通い始めて最初に憶えた4月の聖句です。同じクラスに近隣の書店のお嬢さんがいらして、そのお母さんが、「お店に来たお客さんに突然『神は愛です』』とか言っちゃうのよね。」と言っていたことを懐かしく思い出します。幼い子どもたちにとって、何か新しいことを覚えるということとは、とても誇らしく、皆に教えたいという気持ちにさせられることなのでしょう。3歳の幼子の立派な宣教師活動です。

私の勤務していた小学校では、礼拝カリキュラムが定められていて、毎月、教会暦と学校行事との関連で月の聖句・主題が決められています。

た。月初めの全校礼拝ではその聖句に基づいた礼拝が守られています。そして1ヶ月間、礼拝担当者は自由に自分で聖句を選ぶこともできましたが、多くは月の聖句・主題に沿った奨励がなされました。児童は、全員「みことばノート」を持っていて、その日の礼拝の聖句を書き写し、礼拝の要旨、感想をノートにまとめていくことになっていました。さらに毎朝クラスでは、月の聖句の暗唱、3年生からは英語の授業では、英語で暗唱します。月の聖句を書き写すこと、暗唱することによって、聖句を自分のものとし、「み言葉を生きる」ことができるようになっていきます。4年生以上の子どもたちで構成される児童会活動のひとつである宗教委員の子どもたちは、児童礼拝のなかで、自分の好きな聖句について自分の言葉でお話をします。その言葉からは、たどたどしくても、み言葉を伝えたい、イエス様のことを伝えたいという強い気持ちが伝わってきました。

小学校の教育の中で、キリスト教教育は、礼拝、聖書の授業のみではなく、全ての教科の授業、全ての学

校行事の中で具体的に実践していくことであり、学校生活どこを切り取ってもキリストの香りのする学校でありたいというのが、教職員全員に願っていました。児童全員が日曜日に近隣の教会学校に登録し、約8割の児童は、年間半分以上日曜日には、教会学校に通っています。私は、授業の中で、学校行事の中で、全ての学校生活の中で、子どもと共に生きる時間を通して、子どもの純粋な信仰に教えられていました。「心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない。」(マタイ18章3節)イエス様に招かれている子どもたちから教えられ、子どもたちと共に生きる毎日の生活の中で、子どもを通して「み言葉を生きる」力が与えられました。

私の勤務していた学院は、1880年10月28日、アメリカ・プロテスタントメソジスト教会のH. G. ブリテン宣教師によって創立されました。ブリテン宣教師は、アフリカで2年間、インドで17年間宣教師として働かれた後、インドで共に働いた親友のエリザベス・ガスリー宣教師が日本に女子教育のために旅立とう

とする直前にサンフランシスコで病死したため、自分が代わりに日本で働かれることを決意し、横浜の地にブリテン女学校を創立しました。ブリテン宣教師は、既にアフリカ、インドでの働きを終え、残りの人生はアメリカで働こうと考えていたのですが、ガスリー宣教師の日本の女子教育への熱い決意、そして「全世界に行つて、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。」というみ言葉に押されて来日されたとき、既に58歳でした。ブリテン宣教師は、幼いとき不慮の事故から18年間寝たきりの生活を強いられていましたので、決して丈夫な身体ではありませんでした。58歳で、言葉も習慣も環境も全く異なる日本で働くことは、苦悩、困難も多かったことでしょう。

小学校教諭としての働きを終えて、私は定年後の生活は或る程度思い描いていましたが、子どもたちの純粋な信仰と、ブリテン宣教師の58歳での決意に勇気をもらい、献身を決意し、神学校で学び始めました。今、ルーテル教会に限らず、日本のキリスト教会は、牧師不足、信徒の減少・高齢化、財政難など厳しい状

況にあります。この40年間の下降傾向は、新型コロナウイルスの感染拡大による礼拝・集会などの制限、オウム真理教事件に続き、旧統一教会の政治との関わりが露見することにより拍車がかかりました。このような厳しい状況の中で、藤が丘教会は、宣教40年に向けて、教会の目指す方向（使命・目標・行動指針）について、「私たち」の宣教計画を検討しています。8月の宣教委員会で、私なりに3回のアンケート結果の分析をし、発題の機会を与えていただいたことは、この「私たち」の中に、実習期間加えていただいたことを実感しています。

私の母校も勤務校と同じ時代、1884年11月6日カナダ・メソジスト教会の宣教師によって創立された学校です。私にとつて関わりの深い二つの学校の創立記念日を迎える秋、当時の宣教師の日本の女子教育、キリスト教教育に向けた熱意を理解し、世界宣教に向けてイエスが弟子たちに向けて語られたこのみ言葉を、牧師への道を歩み始めた自分への言葉として受け止めて前に進んでいきたいと思えます。

●木〇子さんより

早朝散歩を日課にしてから久しく経ちます。

昨年の夏は朝4時半起きて1時間近く歩いていたのですが、歩きすぎはよろしくない事を知り、今はその半分に抑えています。

散歩コースは稲田、住宅地を抜けて右折するとそこは別世界、両サイドを里山に囲まれた稲田が一面に広がります。

つい先日収穫を終え、新苗を植えた付けたばかりだと思っていた稲田に、既にたわわに身をつけた稲が黄金色に輝き「こうべを垂れて」実っている景色は圧巻で、農耕民族のDNAが騒ぎます。

黄金色とはよく言ったもので、金色などどこにもないのに、お米という美味しくもありがたい自然の恵みと太陽の光が交わると、金色に輝いているようにしか見えないから不思議です。

また、歩いていると新鮮な驚きもあります。

鶯はずつと春告鳥だと思っていた

のですが、酷暑の中で蝉と競うように鳴いていたのはびっくり。

ありふれた大木だと思っていたのに、いつの間にか小さな柿の実をびっしりつけた野生の柿の木、と知った時は瞬時に秋の訪れを実感しました。

ほぼ同時に夫は自転車、私は歩



きで家を出ます。

夏はうっかり6時過ぎに目覚めて出かけると、真夏の日差しが強さは散歩を修行に変えますし、蚊除けスプレーを忘れると、ずつと顔周りはたきながら散歩する人になるので、私にとつてこの2点は要注意です。

アンケート（デルファイ法）から見えて来たもの

昨年から3回にわたつてのアンケートへのご協力をいただき、ありがとうございます。

「デルファイ法」という耳慣れない手法を用い、第1回アンケートでは、普段お聞きすることの出来ない、「小さな声」をお寄せいただきました。第2回アンケートでは、お寄せいただいた声を分類し、選択肢としてご回答いただきました。つまり、皆さんから寄せられた声（第1回）を、皆さんで評価（良い悪いではなく、同意するかどうかの選択）をしていただきました（第2回）。第2回で「伝道、教育、奉仕」に関する質問がわかりにくかったようで、質問を改めて、再度実施させていただきました（第3回）。

「アンケート」という表現を用いましたが、通常のアンケートとちがいで、回答率などの数値はあまり問題ではありません。言うなれば、「回答しない」という選択肢も、有効なるのです。大切なことは、皆さんから普段声にならない声をお聞きす

ることにあり、またそれを互いに評価することになりました。

これまで信徒懇談会や総会の席では、時間的な意味でも、これほどまで多くの声をお聞きすることは出来なかつたと思います。このことからするならば、たとえ回答率が低いという現実があつても、大きな意味があつたということがわかります。

今後は、お聞かせいただいた、皆さんの声を「宣教計画」につないで行くかという作業が重要になつてまいります。そうすることで、藤が丘教会の宣教計画が、牧師や役員会が

●洗礼の信認式（アフアメーション）について 2

実際に【洗礼の信認式（アフアメーション）】の式文から、その意味を探つてまいります。

【1 勸め】

式は「勸め」をもつて始まります。ここで、この日集められた理由について、次のように触れられています。

「あなたがたは洗礼を通して与えられた数々の恵みに感謝し、キリストとともにすべての者に仕える群れとされたことを自ら受け止め、確認

立てたものではなく、皆さんと共に作り上げたものとされると思うのです。現在、役員会では準備を始めています。もちろん役員だけではなく、より多くの信徒の皆さんのお力をいただいで、宣教計画案作りを、より多くの方々と進めているところであります。もちろん、それだけで作つてしまうのではなく、信徒懇談会などを用いて、改めて皆さんの声を聞かせていただき、修正を加え、最終案にすることが出来ればと、願つております。一緒に作つてまいります。どうぞ、声を聞かせてください。

をし、新たに生き始めるために集められました。」

ここで明らかにされている、この式の目的は、第一に「洗礼を通して与えられた数々の恵みに感謝すること、第二に「キリストとともにすべての者に仕える群れとされた」ことを「確認し、新たに生き始める」ということにあるのです。

洗礼を受け、間もない頃は、新鮮であつた気持ちが時間と共に、当

たり前のようになってしまふ経験は、誰にもあるでしょう。しかしそうではなく、洗礼を通して与えられた数々の恵みに感謝し、すべての者に仕える群れとされたことを確認して、私たち教会の群れは生きるのです。

【2 祈り】

続いて、司式者によって次のように祈られます。「洗礼の賜物と約束においてあなたの僕として私たちを保ち、あなたによって新しくされたすべての心を一つにしてください。」

徳善義和先生は、その著書で、ルターの理解について次のように書いています。「人間はキリスト者であるのではなく、キリスト者となるのである。人間がキリスト者であることは、自明の、自然の成り行きではなく、人間が自ら（その行ないをもつてにせよ、思考をもつてにせよ）到達し、その状態を当然のこととして持続できるのではない。キリストのゆえに、キリスト者とされるといふ意味で、キリスト者となるのである。」（「自由と愛に生きる」教文館・1996年）

「キリストのゆえに、キリスト者となる」と言われていますが、大切なことは洗礼を受け、キリスト者とされた人が、その後も自然にキリスト者であるのではないということです。絶えず新たに、キリスト者とされていくのです。そうであるならば、私たちが繰り返して、自らの洗礼を確認し、新たに生きることが当然のことではないかと思うのです。

【3 信仰の告白】

この部分の翻訳は実に簡単でした。なぜなら洗礼式の式文そのものだからです。洗礼を受ける際に告白した信仰を、「洗礼の信認式（アフアメーション）」においても同じように告白し、信仰を新たにします。

【4 洗礼の信認】

信仰の告白を受けて、洗礼の信認（アフアメーション）に入つて行きます。実はこの翻訳も簡単です。洗礼式において問われている、キリスト者としてのあり方を再度確認しているからです。

この部分がこの式の中心的な内容となりますから、「洗礼を確認

し、肯定する」この式は、洗礼を受けたことを確認し、肯定することにより、洗礼を受けた者としていかに生きるべきかを約束した、洗礼の約束（「2 祈り」で触れられたことですね。）を確認、肯定し、また「すべての者に仕える群れ」とされたことを確認、肯定する（受け入れる）のです。

この後、【5 祈り】、【6 按手】と続き、式は閉じられます。

洗礼の信認式は、11月27日、12月4日の礼拝にて、執り行われる予定です。（了）

宣教40年に向けて 「教会の目指す方向」

定年教師の清重尚弘先生から贈呈された、「実践 教会役員」（坂本雄三郎著）に、「教会活動はその『目指す方向』が最も大切で、それは教会の『使命』、『目標』、『行動指針』の形で示すことができます。」と記されています。この3つの柱について、教会（役員会だけでなく、信徒一人ひとり）の間で、共通認識を得ていることが大切です。それによって、教会活動（伝道、教育、奉仕）

が揺らぐことが抑えられます。牧師が変わるたびに、教会の方向性も変わるのには、教会成長の妨げになるでしょうから、教会として上記の「3つの柱」を確立させることに、目を向けたいと思うのです。

「使命」については、教会規則に次のように定められています。

「この教会は、キリストの命に従って、信仰の交わりをなし、福音を宣べ伝え、みことばを教え、愛による奉仕をなし、これらのことによつて神に仕えることを目的とする。」

教会が教会であるために、欠かせ

ないことが明らかにされています。

教会は「信仰の交わりをし、伝道教育、奉仕をする」のですが、「これらのことによつて神に仕えること」を目的としているということです。

「神に仕える」。これが私たち教会の使命であり、目的なのです。それは人が増えることでも、財政的に安定することでもなく、「神に仕える」ことにかかっているというのです。

あらゆる活動において、「神に仕えている」かどうか問いつつ、歩み続けたい。宣教40年を迎えるに当たって、共に歩みましょう。（佐藤）

今月の受洗記念日の皆さん

- 11日 清〇〇兄、藤か〇ね姉 13日 〇飼由〇子姉
〇林和〇兄 24日 清〇〇子姉 25日 〇田〇一郎兄
27日 宮〇ま〇か姉 28日 〇村〇樹兄
29日 〇山〇兄、〇山〇子姉

おめでとうございます。

いねぐさです。



「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです。」ローマの信徒への手紙 10章17節
藤が丘教会ウェブサイト <https://www.jcjc-fujigaoka.org/>
フェイスブックで礼拝のライブ中継をしています。（毎日曜日午前10時半）

■牧師室より

いつもCSのために、お祈りいただき、ありがとうございます。コロナ禍にあつて中止していた、教師会を、久しぶりにいたしました。積極的な協議の時となり、「CSの案内を作り、玄関に掲示すること」「礼拝とは別に、トーンチャイムの会（？）を企画し、呼びかけること」が決まりました。CSの案内はすでに、掲示されており、トーンチャイ

ムについても、準備を進めているところです。

神さまは私たちの思いを高く超えている方ですね。CS教師がこのように、準備を始めると、予想しない形で、子どもたちを与えてくださいます。9月には、「キリスト教の学校に行っている子どもを通わせた」と、お電話があり、小学1年生の男の子が参加しました。またホームページから問い合わせがあり、「娘に教会を味あわせたい」とのことです。引き続きお祈りください。（佐藤）